

## 大内文化がはぐくんだ

「来る者は拒まず」。

山口人に、乾杯！



### 確

かに今の山口にはゆるやかという言葉が似合う。だが、大内氏二十四代弘世から三十一代義隆(一五〇七〜一五五二)までの約二百年間、朝鮮半島や明との貿易によって莫大な財を成した当時の街の印象は、ゆるやかというより華やかだったはずだ。都をはじめ各地から多くの文化人を受け入れ、まさに「西の京」の別名にふさわしい賑わいを見せていたという。足跡を残したのは、連歌師の宗祇、画僧・雪舟、そして、宣教師フランシスコ・サビエル……。市内には、宗祇の歌碑(八坂神社)や常栄寺雪舟庭、サビエル記念聖堂など、ゆかりの地が点在している。

山口赴任中の小野さんは、それらの名所からの中継も担当した。「山口の自慢の場所を全国に紹介することに燃えていました」とほほえみ、続けて「やっぱり一番印象的なのは、人温かく対応してくれた地元のみなさんとの出会いが私の一番の宝物です」と、きつぱり。

「よそ者の私が『あなたはここまで』って扉を閉ざされたことは一度もありませんでした。失敗

続きの私を優しく受け入れ、育ててくれた。山口には、外からやって来た人を擁護し、育てようという土壌があるようです。もしかしたらそれは、大内氏の時代から人々に受け継がれている気質なのではないか？」

とかく保守的とみられがちな山口だが、「決して排他的ではなく、むしろ『来る者は拒まず』というおらかさを感じます」と、小野さん。



「山口は、雪だるまの芯」。

進化を続ける故郷に  
愛を込めて贈る言葉

### さ

らに、ハラハラ、ドキドキな五年間を経て東京転勤が決まった当時を思い出し、

「誰からも『行かないで』とは言われませんでしたね。『行け行け、東京で頑張っただけで錦を飾れ』って背中を押されたようで、『去る者は追わず』という一面も感じました」と、笑う。

「子の活躍を願う親心めいていて、しかも、太っ腹。その懐の深さは、大内文化の遺産のような気がします。山口の人々の心には、豊かな文化が花開いた街ならではの誇りや自信が受け継がれ、秘められているのかもしれないね」

温かな激励に送られて、山口を後にした小野さん。その後のめざましい活躍ぶりは、衆知のとおりだ。そして、その様子を喜んでいる人たちが、山口には今もたくさんいる。

「本当に有り難いことです。私にとって山口は、雪だるまの真ん中、最初に丸めた玉のような存在です。受け入れてくれる人たちがいた、という喜びを核にして、この雪だるまをどんどん大きくしていきたい！」

山口の街もまた、大内文化という歴史を核としながら年々新しい変化を加え、豊かさを増してきている。たとえばメディアアー

トの発信基地・山口情報芸術センター(YCAM)は、アーティストが山口に滞在しながら作品を作っていく手法なども取り入れた、新しいタイプの複合文化施設だ。「よそから来た者を受け入れ、新たな文化を作っていく」という気風に乗った施設ですね。私の赴任中にこれがあつたら、通いつめていたでしょうね」と小野さん。その口調には、故郷の発展を喜ぶ温もりがあった。

昨年大晦日のNHK紅白歌合戦で、小野さんは飛行船からの中継を担当した。

「飛行船から地上を見下ろすと、崇高な気分になりました。人間の営みはささやかなことかもしれないけれど、それだけに愛しく、受け継がれていくことの尊さも感じられて……」

歴史も気風も、人々が生き、過去の遺産を守りながら進化を取り入れ、未来へと受け継いでいくもの。そして、そこに個性がみえれば、人々を魅了するに違いない。山口には、それがあつた。

小野文恵さんから第二の故郷・山口へ、愛を込めて贈られたメッセージの数々は、そんな確信を与えてくれたのだった。

山口には、外からやって来た人を擁護し、育てようという土壌があるようです。もしかしたらそれは、大内氏の時代から人々に受け継がれている気質なのではないか？



#### ●プロフィール 小野文恵(おのふみえ)

NHKアナウンサー。日本語センター所属。広島県府中市出身。一九九二(平成四)年にNHK入局後、初任地の山口放送局に赴任。一九九七年までの五年間在籍し、東京アナウンス室に異動。現在、「ためしてガッテン」「鶴瓶の家族に乾杯」「土曜スタジオパーク」などの司会を担当。二〇〇四年、二〇〇八年には「紅白歌合戦」の司会も務めた。